

### ◆◆四月の養豚◆◆

四月はすべての生物が一斉に活動をはじめるときであり、一年のうちでも最も恵まれた季節です。豚は春のあたたかい日差しを体一ぱいにうけてメタメタ育ち、仔豚の育成には絶好の時期です。しかし四月もなれば過ぎると気温は日増しに上り、養豚家にも最も恐ろしい豚の伝染病の発生もそろそろ多くなってきました。

昨年の夏は新潟市に、今年の一月は南魚沼郡六日町と塩沢町にそれぞれ豚コレラが発生しています。「豚コレラ」が発生すれば養豚事業はおしまいで村内から豚コレラが発生しないよう衛生面に充分注意して毎日の管理にあたって下さい。

**着眼点**

- 一、分娩、育成の好季節、春仔豚はほかのどの季節よりも発育が順調で飼いやすい。
- 二、仔豚の下痢の手当は早いうちに。下痢が長引けば発育がおくれる。
- 三、芽の出たジャガイモは危険、よく芽をとって与えること。
- 四、つとめて青草を多く与えること。

**仔豚の下痢**

丸々と育ってきた仔豚が下痢をはじめると、みるみるうちにやせてしまします。生れた仔豚に下痢をさせるかさせないかは、管理者の胸の見せどころです。下痢には細心の注意を払って育成につとめましょう。

- 1、生後七〜一〇日ぐらゐの下痢。
- 2、一〇〜三〇日頃の下痢。
- 3、三〇日頃の下痢。

この時期の仔豚は母乳しか飲んでいません。そこで原因はほとんど母乳にあるようです。

### イ、ニサが不消化の場合

仔豚の消化器は母乳には馴れていません。そこでエサ付けのニサが消化の悪いものでは途端に下痢をしてしまいます。また仔豚が少し食い込んできれば早く大きくしよとの親心からつい多く与えがちとなり、少し美味しく味付けでもすれば、仔豚もまた食べすぎて下痢を起しやすくなります。

この時期の注意としてはエサ付け用のニサは、できるだけ消化のよいものを使う。量ははじめのうちはなるべく控え目にする。また仔豚が母豚のエサを食べて下痢をはじめるとこの時期です。

エサを食わなくとも、母乳を十分に飲んでいたので仔豚の発育にはそう大きな障害はありません。下痢が止まったところで、またエサ付けを最初からやり直します。

また母豚のエサ箱とその周囲を常に清潔にしておかなければなりません。母豚のエサの残りを仔豚が食べて下痢を起すのが大半です。

### 総合優秀賞は 樋口寅雄(北野)さん

恒例の第四回岩室村種豚共進会が三月二十日行なわれ、和納駅の農業倉庫前に出品しての美人(豚)コンテスト(?)の予定が当日はいくくの強風雨で、豚舎をまわって審査がなされた。

本村の種豚も年々充実して今回出品されたものはいずれも甲、乙つけがたく審査員を困惑させた。

審査では、

- 1、後腹のよいものには肥満型が概して多い。
- 2、ランドレース種の特徴に欠けているものがある。
- 3、後腹のしまりがたりない。
- 4、飼養管理に一層意を注いでもらいたい、審査講評がなされた。

出品された種豚はヨークシャ種十九点、ランドレース種十一点、

写真は審査会での審査(前列上)と人賞を喜ぶ(津雲田)樋口(北野)山上(富岡)星野(和納) (右)

### 天候の変動が大きい年

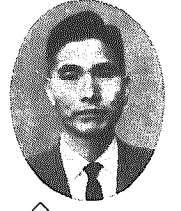
太陽黒点が極小となった年前後は、異常気象と大きな農業災害が発生しやすくなっています。たまたま昨年がその極小年であったことから気象庁では、予報の正確を期するため慎重な検討を進めています。したがって四月(九月)を代表し、同日新潟気象台でも北陸地方の暖候期予報(四月〜十月)を発表しました。

なお、長期予報及び暖候期予報の要点は次の通りです。

- 1、春、夏、秋とも天候の変動が大きい。
- 2、四月下旬から五月上旬にかけて、遅霜のおそれがある。
- 3、梅雨入りは早め、明けは平年並みで、梅雨期間は長くなる。
- 4、六月、七月は地陸を含めて北日本を中心に、時々低温があらわれる見込み。
- 5、六月下旬から七月上旬にかけて集中豪雨の懸念がある。
- 6、盛夏期の気温は、ほぼ平年並だが変動があり、秋の訪れは早い見込み。
- 7、台風の発生は昨年より少ないが、本土に接近または上陸する台風は多い見込み。

これを要約すると、今年には近年にない異常気象の年となつていきますので、今後の予報に充分注意が大切です。

ス種六名の二十五点で、入賞者は次のとおり。	鈴木 正吉(西中)
総合優秀賞	大平 正信(西中)
樋口寅雄(北野)	山田 隆(西中)
本田 政男(津雲田)	堀越 正木(北野)
山上 四郎(夏井)	佳良 大関
星野 真作(和納八区)	幸男(高橋)
川上 作一(富岡)	石川 留治(猿ヶ瀬)



### 限界点にきた早植

## 稲の声を聞く米作りを

卷普及所長 西村 欣策

◇：毎年田植が早まり、労働力の不足がなげられて、稲作りの指導に当らる専門的な立場から見た問題点について、西村所長さんから玉稿をいただきます。

一、はじめに

「弁証法的に言うならば、世の中の一日一日は進歩である」このことは、私たちの生活についても、生産の仕事についても、言えることであるが、この頃の稲作栽培を見ると、それは必ずしも、「正しい足どり」で進んでいるとは言えないのである。この頃の農村に、目立つて苦しくなったものに、労働力の問題があり、労働不足のために、人間の知恵として、稲作栽培も省力化が進んで行く。しかし、どうして手労働を離れられない田植作業を抱えている稲作業者は、今では、その適応の方法を間違えているのではないかと、大きな疑問をもつものである。

二、鍵っ子稲作

稲作栽培とは、稲の身になって育てるということである。米を取るということではなくて、人間が米を作るのであるから田植がされるのである。田植の時期が早過ぎ

とかく世の中には、仕事で、温度が足りない場合は、私たちが、根が伸びて、子供を丈夫に育てることより、仕事が大変になったりする。「鍵っ子」というような、現代の悲劇が現れたりする。

どうやらこの頃では、稲をよく育てるよりも、仕事を早く終った方がよい、ということになりかねない。幸か不幸か、稲は泣き声も上げない。しかし、泣き声も、丈夫に育てることには、私たちの大事な責任ではないだろうか。

三、稲の声

この頃の稲が、もしも声を出すとすると、どのような声を出しているか、を聞いてみたい。

(一) 第一の声

みなさんの御苦労はわかっています。あんな早く田植をして貰うことは、私たちが、迷惑千万です。この頃、五月十二日頃から田植がされると聞きますが、田植の時期が早過ぎ

二、問題とする点

このように、早生の品種も限界温度におびえ、おけるという品種は、現代稲作栽培の悲劇という所であり、それをよく眺め、稲の声を聞いてくれと、人間たちに訴えている様である。それに続いて、田植を急ぐことは、春の代かきまで作業が急がれて、労働力不足はますます激しく機械はますますの経費をかけて行くのである。

人間の知恵とは、もっと合理的に進められて、はじめて立派なものになり、一日一日が進歩として見られるのであろうか。

今では、米の生産が足りなくて、農産物の中で、米をたくさんとることが、一番よい仕事になっている。米の一俵位取り不足し

て出稼の方がよいと、稲の栽培を頼みない人たちが、早生から晩生までバラバラに入り乱れたところへ、共同でいっせい防除をする効果が高いからやらない、といつも、それでは話のすじが通らない。無理に話のすじを通そうと思ったら、穂ぞろい期になったもの、穂ぞろい期に石伝いに、何回となく、同じ田圃をまわらなければならぬ。

共同防除は理想的でも結局個人でやった方が能率的であるということも、不合理とわかっていても各人が高い金を出して散粉機を買わなければならない。

中干にいても同じである。中干の適期は早中晩生それぞれ違うのだから、いかにわかっていても、その品種にマッチした中干の実施は不可能である。

話合いで適当なところで中干がよい状態では、いかに稲作技術の研究が進められても、実際に田圃が受入れてくれなければ、稲作りは一世代も昔へ逆もどりにしているともいえる。

一方で人手不足と言われながら、他方ではこのように不合理の形態が続けられていくわけである。稲の生理に合った稲作りの話合いで、稲作りを考えよう。

毎日一回水洗いして残ったニサをおかないことが仔豚です。

恒例の第四回岩室村種豚共進会が三月二十日行なわれ、和納駅の農業倉庫前に出品しての美人(豚)コンテスト(?)の予定が当日はいくくの強風雨で、豚舎をまわって審査がなされた。

本村の種豚も年々充実して今回出品されたものはいずれも甲、乙つけがたく審査員を困惑させた。

審査では、

- 1、後腹のよいものには肥満型が概して多い。
- 2、ランドレース種の特徴に欠けているものがある。
- 3、後腹のしまりがたりない。
- 4、飼養管理に一層意を注いでもらいたい、審査講評がなされた。

出品された種豚はヨークシャ種十九点、ランドレース種十一点、

写真は審査会での審査(前列上)と人賞を喜ぶ(津雲田)樋口(北野)山上(富岡)星野(和納) (右)

太陽黒点が極小となった年前後は、異常気象と大きな農業災害が発生しやすくなっています。たまたま昨年がその極小年であったことから気象庁では、予報の正確を期するため慎重な検討を進めています。したがって四月(九月)を代表し、同日新潟気象台でも北陸地方の暖候期予報(四月〜十月)を発表しました。

なお、長期予報及び暖候期予報の要点は次の通りです。

- 1、春、夏、秋とも天候の変動が大きい。
- 2、四月下旬から五月上旬にかけて、遅霜のおそれがある。
- 3、梅雨入りは早め、明けは平年並みで、梅雨期間は長くなる。
- 4、六月、七月は地陸を含めて北日本を中心に、時々低温があらわれる見込み。
- 5、六月下旬から七月上旬にかけて集中豪雨の懸念がある。
- 6、盛夏期の気温は、ほぼ平年並だが変動があり、秋の訪れは早い見込み。
- 7、台風の発生は昨年より少ないが、本土に接近または上陸する台風は多い見込み。

これを要約すると、今年には近年にない異常気象の年となつていきますので、今後の予報に充分注意が大切です。